

観察者の帰属作用に及ぼす観察訓練の効果[†]

坂 西 友 秀¹⁾

目的

行為者と観察者の帰属の特徴的傾向に注目し、仮説を提起したのは Jones & Nisbett (1972) である。Jones & Nisbett は、行為者は一般に自己の行動の原因を外的要因に求める傾向が強いのに対して、観察者は同じ行動の原因を行為者自身に求める傾向が強いと主張した。この Jones & Nisbett の仮説については、行為者と観察者の視点の違いの観点から多くの検討がなされてきた (Taylor & Fiske, 1975 ; Storms, 1973 ; Regan & Totten, 1975 ; Gould & Sigall, 1977)。そして両者の帰属の相違は、両者の視点の違いによって大きく影響されていることが明らかになってきている。すなわち、行為者と観察者の視点の違いによって、両者によって知覚される対象の目立ちやすさ (salience) が異なり、その結果両者の帰属の相違が生じると考えられる (Taylor & Fiske, 1978 ; Taylor, Crocker, Fiske, Sprinzen, & Winkler, 1979)。また、従来の研究では、観察者の帰属作用において、物理的視点のみならず心理的視点を変えることによって対象の目立ちやすさを変え、観察者に特徴的といわれる傾向的帰属傾向を変化させ得ることも示されている (Regan & Totten, 1975 ; Gould & Sigall, 1977)。つまり、行為者の心情を理解するよう共感的に観察する観察者は、自己の視点から観察する観察者よりも、行為者の行動の原因を状況の要因に帰属しやすくなる。また、観察者に共感的視点から観察及び原因の帰属を行なわせた場合は、行為者の成功、失敗にかかわらず、自己の視点から観察及び帰属を行なわせた観察者よりも外的要因への帰属が強くなる (坂西, 1981)。このことから、共感的観察者が自己の視点から行なう帰属作用は、行為者の視点をとった際に目立って知覚される対象に影響されると考えられる。このように、我々の判断の過程は、論理的には非情報的で無関連な刺激であっても、それが目立つ社会的刺激である場合には、そ

れに不当に強く影響されることがある。これは顕現効果 (salience effects) とよばれている (Taylor & Fiske, 1978)。

ところで、先行研究においては、帰属作用に及ぼす対象の顕現性の効果が現われる基本的な条件は明らかにされていないが、Taylor et al. (1979) は次のことを明らかにしている。つまり、顕現効果は、被験者の自我関与が比較的低く注意の水準が低い場合にのみ限定されるのではなく、高い自我関与によって高水準の注意が喚起された場合にも同様に現われる。このことをこれまでの共感的観察者の帰属作用に関する研究で考えてみると、観察の初期においては、共感的観察者は自我関与が少なく、行為者への感情移入が少ないと思われる。よって、共感的観察が帰属作用に及ぼす効果は、自我関与の低い事態で視点の変化によって一時的に状況要因が顕現して知覚される結果とも考えられ、持続性のある効果とは必ずしもいえないかも知れない。この点に関しては、行為者と観察者の帰属作用に及ぼす時間の経過の効果を吟味した、Moore, Sherrod, Liu, & Underwood (1979) と Miller & Porter (1980) の研究が示唆的である。

Moore et al. は、時間の経過とともに行為者と観察者の帰属の推移を吟味している。彼らは主に二つの理由から、行為者は時間の経過にともない傾向への原因帰属を強めると予測した。それによると、まず行為者の自己の行動に対する注意の焦点は、時間が経つにつれて移動するであろう。そこで、自己は経験しつつある主体から注意の対象へと移しかえられる。すなわち、初めに行動している時には、環境が知覚的に顕現しているが、一定の時間が経過した後で当該の行動を想起する段階においては、自分が中心的対象として現われ、環境はその背景へと退くと考えられる。換言すれば、前者は認識の主体であり、後者はその客体となるといえよう。

次に、行為者は時間の経過につれて、初めに自己の行動に影響を及ぼしていた環境要因の細部については想起することがしだいに困難になることも考えられる。その結果、最初は自己の行動にとって意味があるようと思われた環境要因の重要性を過少に評価するかも知れない。

これらの予測を実験的に検討した結果、彼らの期待ど

† 本研究を進めるにあたり、御指導いただきました大橋正夫教授に深く感謝致します。

1) 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程（後期）
(指導教官：大橋正夫教授)

おり、行為者は行動を行なった直後よりも、一定の時間が経過した後の方が傾性的帰属を有意に強めた。一方、観察者は時間の経過によるこうした帰属の変化を示さなかつた。

これに対して、Miller & Porter (1980) は Moore et al. とは逆の予測を行ない、行為者と観察者の帰属作用に及ぼす時間の経過の効果を吟味している。彼らは、時間の経過にともない次の事態が生じると考えた。第一には、行為者にとっては、状況の要因がより顕現してきて利用しやすくなる。第二には、行為者は自己を状況に対して効果的に統制したいという動機を低減させる。これらの理由から、行為者は時間の経過につれて状況要因への原因の帰属を強めると予測した。一連の実験の結果から、行為者は当該の事象から時間的に隔たるにつれて、自己の行動及び結果の原因を状況の要因に帰属する傾向を強めることができた。

このように、両研究の結果は矛盾するが、行為者の帰属は時間の経過にともなって変容することは明らかである。このことは、行為者の帰属に近い帰属を行なうといわれる共感的観察者においても同様であろう。しかし、これらの時間経過にともなう帰属の変容は、行為者の当該の行動の反復の有無によって影響されると考えられる。一定の時間が経過した後で、行為者が再度当該の行動を行なうならば帰属の変容は生じないかもしれない。あるいは逆に変容の量を増大させるかもしれない。上記の研究ではこの点に言及していないが、本研究では共感的観察事態を用いて、心理的顕現効果と視覚的顕現効果の作用のし方の解明も含めて、共感的観察の反復が帰属作用に及ぼす効果を吟味する。

すでに Heider (1958) は、“個々の行動は……全体の状況を包み込むような傾向のある顕著な特質をもつ” (P 54) と述べ、行動が社会的知覚において著しく目立つことを示唆している。また Jones & Nisbett (1972) も、行為者は状況に対する図として知覚されやすいことを指摘している。従来の観察者の視点を操作する研究においては、共感的観察者も標準的観察者も共に、ビデオテープで、あるいは直接に事態を観察することから、上記の Heider と Jones & Nisbett の示唆が両観察者の知覚にあてはまる予想される。したがって、両観察者は共に、事態を観察する際に、行為者をより目立つ対象として知覚すると推定される。すなわち、行為者は状況内の図としての性格を強く帯びて知覚されると思われる。とりわけ共感的観察者の場合には、共感的に行行為者の視点をとることによって、心理的には状況要因を強く知覚すると思われるが、同時に視覚的には行為者を目立つ対象として知覚することになる。そのため、こうした心理

的な対象の目立ちやすさと視覚的な対象の目立ちやすさとの対立は、標準的観察者におけるよりも共感的観察者において強いと考えられる。そこで、共感的観察者は観察をくり返すにつれて、行為者の表情、動作、姿勢等の手がかりに注目し、行為者の心情をよりよく理解しようと努めることによってこの対立を解消するであろう。こうして共感的観察者は標準的観察者よりも、観察のくり返しによって行為者への注目を強め、その結果傾性的帰属をより強めることになろう。このように、事態によっては、共感的観察をくり返すことは必ずしも行為者の帰属に近づけることにはならず、むしろ視覚的に目立つ対象（行為者）への帰属を強めると推定される。

以上のことから、本研究は次の仮説にそって、観察者の帰属作用に及ぼす観察の反復効果を吟味する。

仮説 観察者は視点の違いにかかわらず、1回目の観察よりも2回目の観察によって内的帰属を強めるだろう。

方 法

被検者

男子大学生40名。共感的観察条件（以下E条件と略す）と標準的観察条件（以下S条件と略す）の2群に20名ずつランダムに割り当てた。

実験計画

観察条件はE条件とS条件の2条件である。観察の対象となる行為者（以下SPと略す）は、課題に成功するSP（成功SP）と失敗するSP（失敗SP）の2種類である。両観察者は各視点から、まず訓練試行としての観察を、次に本試行としての観察を行なった。したがって、本実験は2（視点）×2（結果）×2（観察回数）の要因計画である。第一の変数は被験者間要因、残り2つは被験者内要因である。

実施期日

1980年5月

手続き

概観 2から6人の被験者が、同じ実験室で新しい心理テストを作成するための調査と称する実験に参加した。まず被験者は、実験者から観察のし方に関する教示を受けた。E条件の被験者はSPを共感的に観察するように、S条件の被験者は自己の視点から観察するように教示された。教示後、教示を十分に理解するための練習と称して第1回目の観察が行なわれた。被験者は、実験者によってテレビに提示される成功SPと失敗SPの達成行動を観察した。被験者は各SPの観察が終了する毎に、SPの成功、失敗の原因に関する質問紙に回答した。E条件ではSPの視点から、S条件では自己の視点から回答さ

せた。次に本試行として、第2回目の観察が1回目と同様の手続きで行なわれた。

達成課題 正方形の厚紙に書かれたアルファベット1文字が、さらに9枚の正方形の小カードに等分割された。この9枚のカードを適切に組み合わせ、もとのアルファベットを作るのが課題である。課題は全部で10問あり、それぞれには正解となるアルファベットの書かれたカードが裏返しに用意された。このカードを見て同じ文字を5分間にできるだけ多く正確に組み合わせる。課題は順番に解き、とばしたり、やり直しはできない。課題の配列は被験者によって異なるように配慮された。

成功、失敗の操作 予備調査による平均正答数を約6問とし、便宜上平均以上を成功、以下を失敗と定義した。成功SPは8問、失敗SPは4問正答するように操作した。

ビデオテープの編集 SPの達成行動を斜め後方から撮影し、直接顔の判断をしなくて済むように調整し、内容は教示—課題の練習一本試行—結果の順に編集した。成功SP、失敗SPとも内容がほぼ同じになるように編集した。

S条件の教示 “これからしばらくビデオテープを見ていただきますが、見ている間はその人の行なうことすべて詳しく観察して下さい。特に言葉に表われない反応にはどのようなものがあるのか、その反応はどのくらい頻繁に現われるかに注意して観察して下さい。またどのような成績をとるかにも注意して下さい。何問正しい答えを作ったか判断していただきますので、結果に注意して下さい。”ただし、記憶のテストでないことを伝えた。

E条件の教示 “これからしばらくビデオテープを見ていただきますが、見ている間はその人がどのように感じながら、どのような気持で問題を解いているかを想像して下さい。その人が心で思っていることや感じていることを自分のことのように思い感じて下さい。問題を解いている人の気持、心情あるいは反応のし方に共感することがあなたにやっていただくことです。”

従属測度 1回目の観察において、被験者はSPの成功、失敗を別々にビデオテープで見たが、各SPの観察が終了する毎に、SPの成功、失敗についての原因の帰属を行なった。質問紙は小冊子にして配布し、S条件では自己の視点から、E条件ではSPが内心考えていると予想されることを、SPの視点から回答させた。それぞれの視点から、能力、努力、運、課題の困難さの各要因について7点尺度(0~6)で評定させた。次に観察者は、第1回目の観察と同じ手続きで第2回目の観察を行ない、質問紙に回答した。最後に実験操作の吟味

のために、各SPの次試行における成功可能性を11点尺度(0~100)で、SPの視点をとろうと努力した程度、SPの熟知度に関して7点尺度(0~6)で全被験者に評定させた。また、被験者自身の予想正答数を自由記述させた。実験終了後、実験者は被験者に実験の目的を説明し、実験に関する質問について答えた。

結 果

実験操作の吟味 観察時及び原因帰属時にE条件とS条件の視点が有効に操作されていたか否かを吟味するために、SPの心情を理解しようと努力した程度について両観察条件の評定値の平均値の差の検定を行なった。E条件とS条件の平均値は、成功SPでは3.95と2.55であり、失敗SPでは4.21と3.10である。いずれもE条件とS条件の間には有意差があり、EはSよりもSPの視点から観察及び原因帰属を行なう努力をしていたことが判明した。被験者自身の予想正答数の平均が6.08問であることから、成功、失敗の基準として用いた平均正答数6問は妥当であったと考えられる。成功SPと失敗SPの次試行の成功期待得点の平均値はS条件では8.45と3.10、E条件では8.68と5.06である。いずれも有意な差が認められた。つまり、成功SPは失敗SPより成功を強く期待されており、操作は有効であった。また、SPが被験者の知人であるか否かについては、全員が7点尺度で0(全く知らない)と評定しており、全被験者がSPを全く知らないかった。

主要な結果

仮説を総合的に吟味するために、全体としての帰属傾向を示す内的要因(Internal factors、以下Iと略す)の帰属得点から外的要因(External factors、以下Eと略す)の帰属得点を引いた帰属得点を算出した。[†]まず、この(I-E)の帰属得点について、次にI及びEの帰属得点についてそれぞれ、2(視点)×2(結果)×2(観察回数)の分散分析を行なった(表1)。

(I-E)の帰属得点(表2) 分散分析の結果、視点の主効果が有意であった($F = 38.05, df = 1/38, P < .01$)。S条件はE条件よりも内的要因への原因帰属が強い。結果の主効果が有意であり($F = 27.60, df = 1/38, P < .01$)、成功は失敗よりも内的要因に強く帰属されている。また、観察回数の主効果は有意に近かった($F = 3.39, df = 1/38, P < .10$)。すなわち1回目よりも2回目の観察後の帰属得点の方が内的帰属傾向が強く

[†] 内的要因とは、能力要因と努力要因を合わせたものであり、外的要因は、課題の困難さ要因と運要因を合わせたものである。

観察者の帰属作用に及ぼす観察訓練の効果

表1 内的要因、外的要因の帰属得点の分散分析表

変動因	df	F 比		
		I	E	I - E
被験者間	39			
視点(A)	1	0.03	75.97**	38.05**
誤 差	38			
被験者内	120			
回数(B)	1	4.75*	0.59	3.39
A B	1	6.64*	0.01	2.29
誤 差	38			
結果(C)	1	62.90**	0.77	27.60**
A C	1	0.76	0.48	0.85
誤 差	38			
B C	1	0.01	5.05*	3.09
A B C	1	7.62**	0.28	4.24*
誤 差	38			

* P<.05, ** P<.01

表2 (I - E) の帰属得点の平均と標準偏差†

	1回目の観察		2回目の観察	
	成功	失敗	成功	失敗
S 条件	6.15 (4.13)	4.10 (2.83)	7.20 (3.40)	3.25 (3.34)
	2.15 (2.85)	- 2.20 (3.84)	3.10 (2.95)	- 1.10 (3.58)
E 条件				

† () 内は標準偏差

なっており、仮説と一致した方向を示している。さらに、視点×結果×観察回数の交互作用が有意であった ($F = 4.24$, $df = 1/38$, $P < .05$)。単純効果の検定を行なうと、成功 SP に対しては 1 回目と 2 回目の帰属得点ともそれぞれ E 条件と S 条件の間に有意な差が認められた ($F = 13.20$, $df = 1/38$, $P < .01$; $F = 13.87$, $df = 1/38$, $P < .01$)。失敗 SP に対しても同様の傾向が認められた ($F = 32.74$, $df = 1/38$, $P < .01$; $F = 15.61$, $df = 1/38$, $P < .01$)。これは、S 条件の方が E 条件よりも成功、失敗にかかわらず内的帰属が強いことを示す。また、成功 SP に対しては、S 条件、E 条件とともに 1 回目と 2 回目の帰属得点の間に有意に近い差があった ($F = 3.55$, $df = 1/38$, $P < .10$; $F = 2.91$, $df = 1/38$, $P < .10$)。両条件とも仮説と一致する傾向を示している。失敗 SP に対しては、E 条件の 1 回目と 2 回目の帰属得点の間に有意に近い差が見られた ($F = 3.89$, $df = 1/38$, $P < .10$)。これも仮説と一致する傾向を示している(図 1, 図 2)。

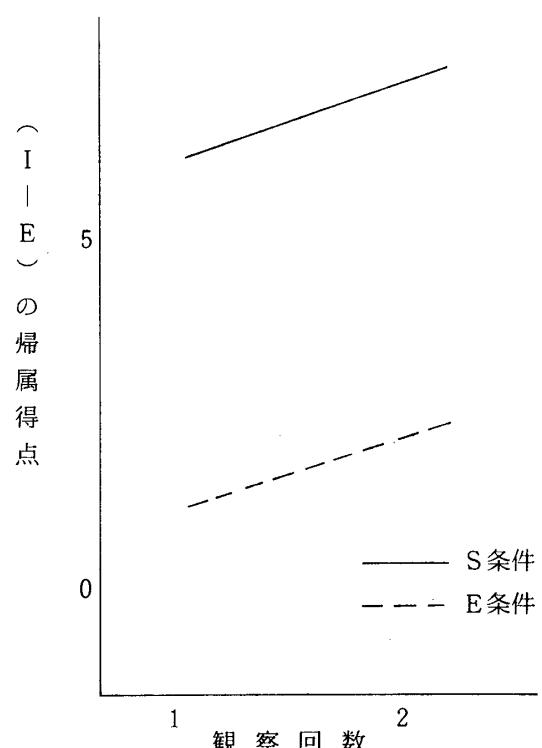


図1 視点×観察回数×結果の交互作用(成功 SP)

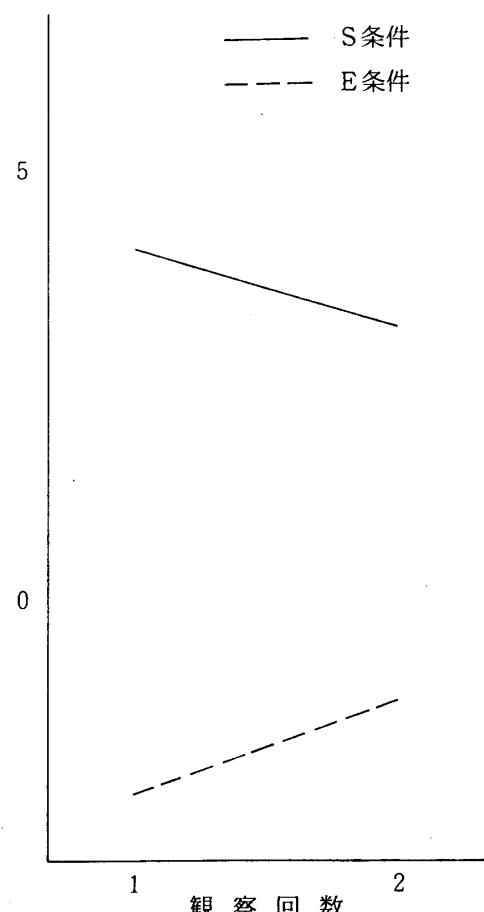


図2 視点×観察回数×結果の交互作用(失敗 SP)

I の帰属得点（表3） 観察回数の主効果が有意である ($F = 4.75$, $df = 1/38$, $P < .05$)。すなわち、1回目より2回目の観察後に内的帰属が強くなる。結果の主効果が有意であり ($F = 62.90$, $df = 1/38$, $P < .01$), 失敗より成功の方が内的要因に強く帰属された。また、視点×観察回数の交互作用が有意であった ($F = 6.64$, $df = 1/38$, $P < .05$)。

単純効果の検定を行なうとE条件の1回目と2回目の観察後の帰属得点の間に有意差が認められた ($F = 11.29$, $df = 1/38$, $P < .01$)。図3に示されるように、1回目より2回目の観察後の帰属得点の方が内的帰属傾向が強かった。また、視点×結果×観察回数の交互作用が有意であった ($F = 7.62$, $df = 1/38$, $P < .01$)。

表3 内的要因の帰属得点の平均値と標準偏差†

	1回目の観察		2回目の観察	
	成 功	失 敗	成 功	失 敗
S 条件	9.00 (2.49)	6.50 (2.06)	9.35 (2.10)	6.00 (2.12)
	9.20 (1.99)	5.15 (2.31)	9.70 (1.55)	6.45 (2.42)
E 条件				

† () 内は標準偏差

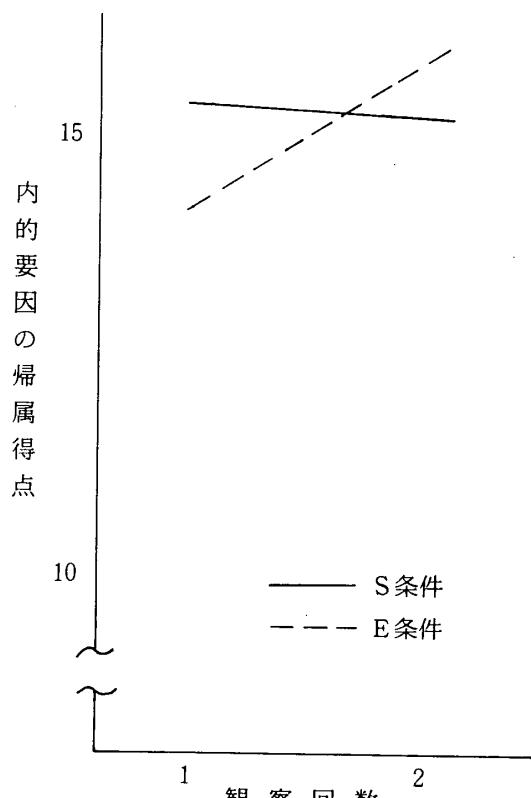


図3 視点×観察回数の交互作用
(成功と失敗の合計得点)

さらに単純効果の検定を行なうと、失敗 SPに対するE条件の1回目と2回目の観察後の帰属得点の間に有意差が認められた ($F = 14.53$, $df = 1/38$, $P < .01$)。図4, 図5からわかるように、E条件は、失敗 SPに対して1回目より2回目の観察によって内的要因への帰属を強めている。

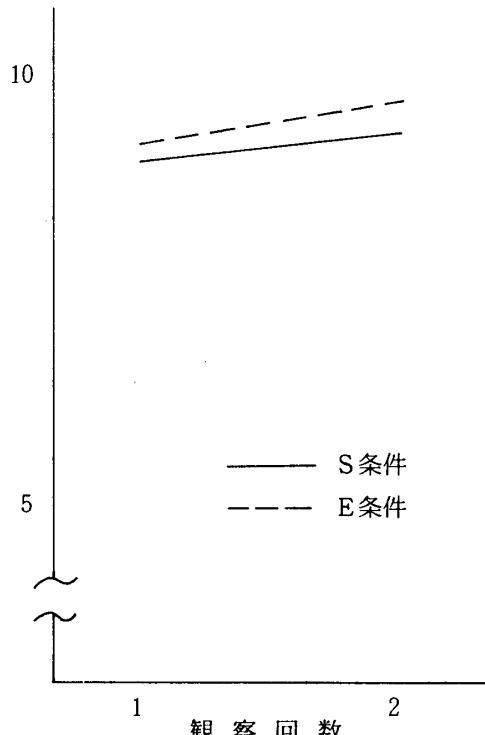


図4 視点×観察回数×結果の交互作用(成功SP)

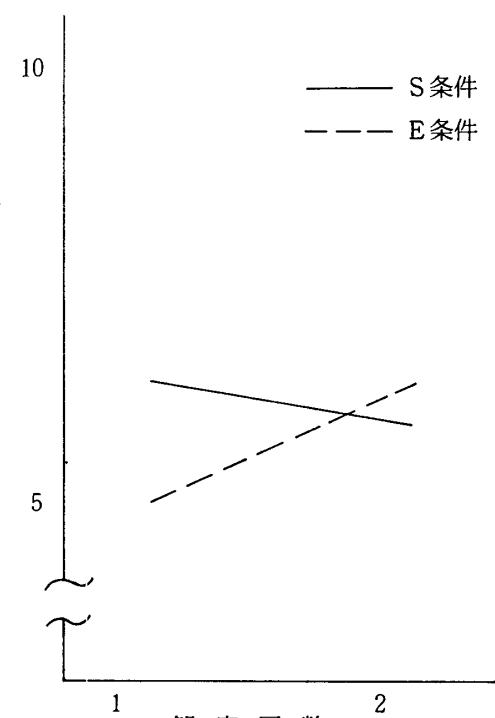


図5 視点×観察回数×結果の交互作用(失敗SP)

これは仮説を支持する傾向である。

Eの帰属得点(表4) 視点の主効果が有意であった($F = 75.97$, $df = 1/38$, $P < .01$)。すなわち, E条件はS条件より外的要因への帰属が強い。また観察回数×結果の交互作用が有意であった($F = 5.05$, $df = 1/38$, $P < .05$)。

単純効果の検定を行なうと, 2回目の観察後の帰属得点についてS条件とE条件の間に有意差が認められた($F = 6.18$, $df = 1/38$, $P < .05$)。E条件はS条件よりも外的帰属傾向が強い(図6)。これはS条件の1回目と2回目の観察後の帰属得点の間に有意差が認められることから($F = 8.89$, $df = 1/38$, $P < .01$), S条件が1回目よりも2回目の観察によって外的要因への帰属を弱めたことにより生じたと考えられる。

表4 外的要因の帰属得点の平均値と標準偏差†

	1回目の観察		2回目の観察	
	成功	失敗	成功	失敗
S条件	2.85 (2.55)	2.40 (1.77)	2.15 (2.10)	2.75 (2.23)
E条件	7.05 (2.16)	7.35 (2.35)	6.60 (2.27)	7.55 (2.11)

† () 内は標準偏差

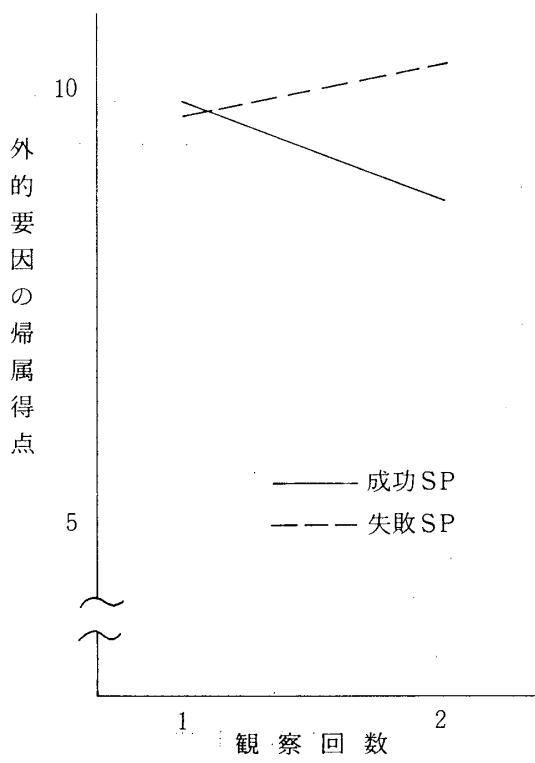


図6 観察回数×結果の交互作用

討 論

本研究では、共感的観察事態を用いて共感的観察の反復が帰属作用に及ぼす効果を吟味した。また、対象の視覚的な目立ちやすさと心理的な目立ちやすさとが、それぞれ帰属作用に及ぼす効果の相対的な強さについても検討した。一般的には、共感的観察のくり返しは、観察者をいっそう行為者の視点に近づけ、状況要因への原因帰属を強めると予想されるであろう。しかし、本研究では共感的観察のくり返しは、状況要因への原因帰属よりも内的要因への帰属を強めると予測した。結果は予想どおりS条件もE条件も観察をくり返すことによって内的帰属傾向を強めた。こうした一般的な予測と対立する結果は、顕現効果に関する従来の研究の知見を活用することによって説明可能であろう。

対象の目立ちやすさが帰属作用に及ぼす効果(顕現効果)を検討した先行研究は、大半が視覚的な対象の目立ちやすさの効果(視覚的顕現効果)と心理的な対象の目立ちやすさの効果(心理的顕現効果)とを別個に吟味している。視覚的顕現効果と心理的顕現効果の相対的な強さを吟味する研究はほとんど見られない。ここでいう顕現効果とは換言すれば、視覚的、心理的に目立つ対象は、論理的にあるいは因果的に関連性がなく非情報的であったとしても、我々の因果的判断に不相応な過大な影響を及ぼすというものである(Taylor & Fiske, 1978; Taylor et al., 1979)。社会的知覚等における顕現効果に関する研究は様々な側面から行なわれてきている。たとえば、Pryor & Kriss (1977)は、文章中にある目立ちやすく注目されやすい項目は原因として知覚されやすいことを明らかにしている。また McArthur & Post (1977)は他者知覚において、特に目立つ人物についてはより多くの情報が保持されることを示している。さらに Taylor et al. (1979)は、こうした顕現効果は特定の状況に限定された現象ではなく、かなり一般性をもつ効果であることを明らかにしている。たとえば、顕現効果は被験者の自我関与が高い事態でも生じ、従属測度に対する遅延時間の大きさにも影響されないこと等である。

本研究においては行為者の達成行動をビデオテープで観察させる事態を導入していることから、行動は社会的知覚において著しく目立つという Heider (1958) や Jones & Nisbett (1972) の示唆が妥当すると考えた。今回の場合、視覚的に目立つ対象は行為者になる。したがって、S条件とE条件は共に行行為者を強く知覚したと推定されるが、特にE条件では行為者の心理的経験を共感的に理解するために、行為者により強く注目していたと思われる。原因帰属のための情報を多く得ようとする

原 著

両観察者にとって、この傾向は観察をくり返すにつれ強まり、2回目の観察で行為者への帰属がより強くなったと考えられる。ただし、本研究では両観察者の対象への注目の程度については吟味していないため、この点は今後の検討課題である。

また、E条件では心理的には状況要因が強く知覚される（Taylor & Fiske, 1975；Gould & Sigal, 1977；坂西, 1981）にもかかわらず、2回目の観察によって内的要因への原因帰属が強くなかったことは、心理的顕現効果よりも視覚的顕現効果の方が優位であったことを示すと考えられる。さらにここで問題となることは、こうした心理的顕現効果に対する視覚的顕現効果の優位性が、かなり的一般性をもって存在するか否かである。この点に関しては、本実験の事態の性質を考慮する必要があろう。共感的観察を導入する帰属研究にも同様にあてはまると思われるが、特に重要と思われる点は、本研究のE条件は行為者と同様の情動が十分喚起されておらず強い感情移入が起きていたと考えられることである。このことが、心理的顕現効果が視覚的顕現効果に圧倒された原因の一つであろう。つまり、E条件の自我関与が強く、観察のくり返しによって十分にSPに対する感情移入が行なわれ、心理的に追体験できたならば、心理的顕現効果が視覚的顕現効果を上回り、共感的観察者の外的帰属は第2回目の観察によって一層強くなったりう。

このように考えると、十分な感情移入が行なわれていない観察事態においては、被験者に共感的観察をくり返し行なわせ、共感的視点をとるように努力させることは、行為者の視点にたたせようとする実験者側の意図とは逆に、行為者の帰属と対立する傾向を強めるかもしれない。すなわち、比較的自我関与の低い事態では、我々の因果的判断の過程は観察のくり返しによって視覚的顕現効果に強く影響されると考えられる。

ところで、対象の目立ちやすさの観点から行なうこうした説明は、今まで行なわれてきた動機論的説明と対立するものではない。つまり、一定の方向に動機づけられた被験者は、対象を知覚する段階で、特定の対象を選択的に強く注目すると考えられる。その対象は知覚的に際立つことになり、原因が帰属されやすくなる。このように、動機づけの方向によってどの対象が目立って知覚されるかが影響されると考えられるのである。

さらに、本研究で示唆されるもう1つの点は、時間経過とともに行為者と観察者の帰属を、同一の経験をくり返すことによって緩和、抑制し得るか否かである。変容は行為者において大きいといわれるが、その原因の1つに時間の経過につれ目立つ対象が異なってくることが

あげられる。これは、従属測度に反応するまでの遅延期間に同一行動を反復経験する機会を設けることによって初めの対象を知覚的に目立たせ続けることができよう。すでに述べたように、行為者の帰属に近いといわれる共感的観察者においてこの予測を吟味したが、S条件同様E条件も観察のくり返しによって内的帰属を強めることができ判明した。先行研究においては、共感的観察の帰属作用に及ぼす効果が、どれだけの期間持続し、どれだけ変容するかについては明らかにされていない。詳細は今後の検討を待つことになるが、本研究の結果からは、共感的観察のくり返しは、時間経過とともに共感的観察者の帰属の変容を軽減、抑制するための有効な手段とはいえない。また、この結果を直接行為者の帰属にまで一般化させるには問題があるが、行為者事態においても同一行動の反復は1回目の観察と違った対象を顕現させ、2回目の帰属を変容させるかもしれない。

要 約

本研究では次の仮説に基づき、共感的観察事態を用いて観察者に同一視点からの観察をくり返させることによる帰属作用への影響を吟味した。

仮説：観察者は視点の違いにかかわらず、1回目の観察よりも2回目の観察によって内的帰属を強めるだろう。

S条件（標準的観察条件）では、自己の視点から、課題に成功する達成者と失敗する達成者の双方を観察させた。一方E条件では、達成者の視点に立ち、その心境に共感するように観察をさせた。第1回目の観察は練習試行、2回目は本試行と称して行ない、各試行毎に達成結果の原因の帰属を行なわせた。

その結果、S条件、E条件とも観察のくり返しによって、行為者への原因帰属を強める傾向が見られた。とりわけ、E条件においてその傾向が強く認められた。討論ではこの点について、観察者にとっての対象の目立ちやすさの点から検討を試みた。

文 献

- 坂西友秀 1981 観察者の帰属作用に及ぼす視点の効果
日本心理学会第45回大会発表論文集 743.
Gould, R., & Sigall, H. 1977 The effects of empathy
and outcome on attribution: An examination
of the divergent-perspective hypothesis. *Journal
of Experimental Social Psychology*, 13, 480-491.
Heider, F. 1958 *The psychology of interpersonal
relations*. New York: Wiley. (大橋正夫訳 1978)

対人関係の心理学 誠信書房)

- Jones, E. E., & Nisbett, R. E. 1972 The actor and observer: Divergent perceptins of the causes of behavior. In E. E. Jones, D. E. Kanouse, H. H. Kelley, R. E. Nisbett, S. Valins, & B. Weiner (eds.), 1972 *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. Morristown, New Jersey: General Learning Press. pp. 79-94.
- McArthur, L., & Post, D. 1977 Figural emphasis and person perception. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13, 520-535.
- Miller, D. T., & Porter, C. A. 1980 Effects of temporal perspective on the attribution process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 532-541.
- Moore, B. S., Sherrod, D. R., Liu, T. J., & Underwood, B. 1979 Dispositional shift in attribution over time. *Journal of Experimental Social Psychology*, 15, 553-569.
- Pryor, J. B., & Kriss, M. 1977 The cognitive dynamics of salience in the attributin process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 49-55.
- Regan, D. T., & Totten, J. 1975 Empathy and attribution: Turning observers into actors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 850-856.
- Storms, M. D. 1973 Videotape and the attribution process: Reversing actors' and observers' point of view. *Journal of Personality and Social Psychology*, 27, 165-175.
- Taylor, S. E., Crocker, J. C., Fiske, S. T., Sprinzen, M., & Winkler, J. D. 1979 *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 357-368.
- Taylor, S. E., & Fiske, S. T. 1975 Point of view and perceptions of causality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 439-445.
- Taylor, S. E., & Fiske, S. T. 1978 Salience, attention, and attribution: Top of head phenomena. In L. Berkowitz (ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 11. New York: Academic Press. pp. 249-288.

(1982年7月31日 受稿)

EFFECTS OF OBSERVERS' REPEATED OBSERVATIONS ON THEIR ATTRIBUTION

Tomohide BANZAI

The present investigation examined effects of repeated observation of actors' achievement behavior on VTR. Several studies have shown that an empathic observer (EO) who was instructed to observe Sp's behavior from Sp's point of view tended to attribute Sp's behavior more to external factors -- Luck and Task Difficulty, etc. -- than an observer who observed the behavior from his own point of view (SO). We assumed a reason why such attributional discrepancy occurs lies in difference between the most salient features for SO and that for EO. We derived, then, the following hypothesis in advance to the experiment: In spite of the difference of their point of view, observers would tend to ascribe the Sp's behavior more to internal factors after the second than the first observation.

An experiment was conducted according to $2 \times 2 \times 2$ factorial design: the first variable was point of view of the observation (empathic vs. standard), then second variable was sequence of observation (first vs. second), and the third variable was performance of Sp's (success vs. failure). The first was a between-Ss, while the second and the third were within-Ss factors. Ss were told that the first observation was a practice trial, while the second for data. Immediately after each of the observations, they were made to make causal attribution of the Sp's performance. Major findings were as follow:

1. The main effect of point of view was significant: SO tends to make more internal attribution than EO.
2. The main effect of performance was significant, too: Ss attributed Sp's success more to internal factors than failure.
3. The main effect of the sequence was significant, as well: Ss made stronger internal attribution after second than after first observation.

Thus, it might be concluded that the hypothesis has been supported.